

問 A 以下で定義されるベクトルに対して、次の問いに答えよ。

$$\mathbf{a}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \quad \mathbf{a}_2 = \begin{pmatrix} \alpha \\ \alpha + \beta \\ \alpha + 2\beta \\ \alpha + 3\beta \end{pmatrix}, \quad \mathbf{a}_3 = \begin{pmatrix} \alpha^2 \\ (\alpha + \beta)^2 \\ (\alpha + 2\beta)^2 \\ (\alpha + 3\beta)^2 \end{pmatrix}, \quad (\alpha \in \mathbb{R}, \beta > 0)$$

- (1) ベクトル $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3\}$ をグラム・シュミットの直交化の手順に従い直交化せよ。
- (2) 行列 $A = (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3)$ を QR 分解せよ。
- (3) 以下の表のような 2 次元データが与えられているとする。

x	0	1	2	3
y	3	-1	0	4

このデータに対して、 x の 2 次関数で y を説明するモデル式

$$y = c_0 + c_1x + c_2x^2$$

を考える。このとき、最小二乗近似を用いてモデル式の係数 c_0, c_1, c_2 を求めよ。

- (1) 求めたい直交化ベクトルを $\mathbf{q}_1, \mathbf{q}_2, \mathbf{q}_3$ とする。まず \mathbf{q}_1 は、

$$r_{11} = \sqrt{\mathbf{a}_1^T \mathbf{a}_1} = 2, \quad \mathbf{q}_1 = \frac{1}{2} \mathbf{a}_1 = \frac{1}{2} \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$$

と求まる。次に

$$r_{12} = (\mathbf{q}_1 \cdot \mathbf{a}_2) = 2\alpha + 3\beta, \quad \mathbf{a}_2 - r_{12}\mathbf{q}_1 = \frac{\beta}{2} \begin{pmatrix} -3 \\ -1 \\ 1 \\ 3 \end{pmatrix}, \quad r_{22} = \|\mathbf{a}_2 - r_{12}\mathbf{q}_1\| = \sqrt{5}\beta$$

であるから、

$$\mathbf{q}_2 = \frac{1}{r_{22}} (\mathbf{a}_2 - r_{12}\mathbf{q}_1) = \frac{1}{2\sqrt{5}} \begin{pmatrix} -3 \\ -1 \\ 1 \\ 3 \end{pmatrix}$$

と求まる。最後に,

$$r_{13} = (\mathbf{q}_1 \cdot \mathbf{a}_3) = 2\alpha^2 + 6\alpha\beta + 7\beta^2, \quad r_{23} = (\mathbf{q}_2 \cdot \mathbf{a}_3) = \sqrt{5}(2\alpha\beta + 3\beta^2)$$

$$\mathbf{a}_3 - r_{13}\mathbf{q}_1 - r_{23}\mathbf{q}_2 = \beta^2 \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ -1 \\ 1 \end{pmatrix}, \quad r_{33} = \|\mathbf{a}_3 - r_{13}\mathbf{q}_1 - r_{23}\mathbf{q}_2\| = 2\beta^2$$

となるので,

$$\mathbf{q}_3 = \frac{1}{r_{33}}\mathbf{a}_3 - r_{13}\mathbf{q}_1 - r_{23}\mathbf{q}_2 = \frac{1}{2} \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ -1 \\ 1 \end{pmatrix}$$

(2)

$$Q = \begin{pmatrix} \frac{1}{2} & -\frac{3}{2\sqrt{5}} & \frac{1}{2} \\ \frac{1}{2} & -\frac{1}{2\sqrt{5}} & -\frac{1}{2} \\ \frac{1}{2} & \frac{1}{2\sqrt{5}} & -\frac{1}{2} \\ \frac{1}{2} & \frac{3}{2\sqrt{5}} & \frac{1}{2} \end{pmatrix}, \quad R = \begin{pmatrix} r_{11} & r_{12} & r_{13} \\ 0 & r_{22} & r_{23} \\ 0 & 0 & r_{33} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 & 2\alpha + 3\beta & 2\alpha^2 + 6\alpha\beta + 7\beta^2 \\ 0 & \sqrt{5}\beta & \sqrt{5}(2\alpha\beta + 3\beta^2) \\ 0 & 0 & 2\beta^2 \end{pmatrix}$$

(3)

$$\mathbf{y} = \begin{pmatrix} 3 \\ -1 \\ 0 \\ 4 \end{pmatrix}, \quad \mathbf{c} = \begin{pmatrix} c_0 \\ c_1 \\ c_2 \end{pmatrix}, \quad A = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 1 & 1 & 1 \\ 1 & 2 & 4 \\ 1 & 3 & 9 \end{pmatrix}$$

とおくと, モデル式と与えられたデータの二乗誤差は,

$$\sum_{i=1}^4 \{y_i - (c_0 + c_1x_i + c_2x_i^2)\}^2 = (\mathbf{y} - A\mathbf{c})^T(\mathbf{y} - A\mathbf{c}) = \|\mathbf{y} - A\mathbf{c}\|^2$$

で与えられる. この二乗誤差を最小にする係数 $\hat{\mathbf{c}}$ は正規方程式

$$A^T A \hat{\mathbf{c}} = A^T \mathbf{y}$$

の解となる. なお, この行列 A は (2) における $A = (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3)$ で $\alpha = 0, \beta = 1$ とおいたものである. QR 分解の結果を用いると正規方程式は $R\hat{\mathbf{c}} = Q^T \mathbf{y}$ に帰着し, 後退代入することで $\hat{c}_2 = 2, \hat{c}_1 = -5.6, \hat{c}_0 = 2.9$ となる.

問 B 以下の命題の真偽を答えよ。ただし、真の場合はそれを証明し、偽である場合はその反例を示すこと。なお、以下では \mathbb{R}^n における標準内積を考え、 $\mathbb{R}^n = U \oplus W$ とする。 V_1, V_2 は \mathbb{R}^n の部分空間である。

- (1) $x \notin U$ ならば $x \in W$ である。
- (2) $x \in U$ に対して、 $x = x_1 + x_2$ のようにベクトルの和に分けると、必ず $x_1, x_2 \in U$ である。
- (3) $V_1 \cap V_2$ は \mathbb{R}^n の部分空間である。
- (4) $V_1 = (V_2)^\perp$ ならば $V_1 \cap V_2 = \{\mathbf{0}\}$ である。
- (5) $V_1 \cap V_2 = \{\mathbf{0}\}$ ならば $V_1 = (V_2)^\perp$ である。

(1) 偽。

$$U = \left\{ c \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} : c \in \mathbb{R} \right\}, \quad W = \left\{ c \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix} : c \in \mathbb{R} \right\}$$

とすると、 $\mathbb{R}^2 = U \oplus W$ だが、 $(1, 1)^T$ は U にも W にも属さない。

(2) 偽。 (1) で構成した U, W を考える。このとき、 $(1, 0)^T \in U$ に対して

$$\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1/2 \\ 1/2 \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} 1/2 \\ -1/2 \end{pmatrix}$$

のように、 U に属さない元の和に分解できる。

(3) 真。部分空間の定義を確認すれば OK。

(4) 真。 $x \in V_1$ かつ $x \in V_2 = (V_1)^\perp$ とする。このとき、直交補空間の定義から $(x \cdot x) = 0$ であり、内積の定義から $x = \mathbf{0}$ 。

(5) 偽。

$$V_1 = \left\{ c \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} : c \in \mathbb{R} \right\}, \quad V_2 = \left\{ c \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix} : c \in \mathbb{R} \right\}$$

とすると、 $V_1 \cap V_2 = \{\mathbf{0}\}$ である。しかし、 V_1 と V_2 は直交していない。